四国遍路の板碑について

岡 本 桂 典（高知県文化財保護審議会長）

About Stone Stupas along the Shikoku Henro

Keisuke OKAMOTO,
Chairperson, Kochi Prefectural Council for the Protection of Cultural Properties

Itabi, one type of stone stupa built in medieval times as a *kuyōto*[1] or a *gyakushutō*,[2] can be found nationwide from Abashiri in Hokkaido to Kagoshima. In Shikoku, Tokushima Prefecture has an Awa-type stone monument using the same green mud schist as in Musashi Province. In Kochi Prefecture, inscriptions using natural stones are distributed, and the oldest inscription is from 1305 at Temple No. 26, Kongōchōji in Moto, Muroto City. The lower itabi, one from the Shikoku pilgrimage, will be introduced here. In the Kanto region, there are many Musashi-type stone monuments of which some have the inscription "Namu Daishi Henjo Kongo." One presently well-known one - an Amida Shuji itabi - from 1525 is located at Tamonji temple in Higashikurume City, Tokyo.

In Kochi Prefecture, four itabi related to Kōbō Daishi and the Shikoku pilgrimage have been identified. The only one with an engraving of Kōbō Daishi from 1613 is located at the Takezaki Kannon-do in Ainogō, Susaki City. Among the itabi related to the Shikoku Henro, I discovered one in Otani, Susaki City, where there are no fudasho along Tosa Bay, one in Kure, Nakatosa-cho, and one in Fuba Hachiman-gu Shrine, Shimanto City. The oldest one with the year - Tensho 19 (1591), a large Kōbō Daishi seed character in the center and "Namu Daishi Henjō Kongō" below it engraved on it is in Kure, Nakatosa-cho. It was built by a person from Okayama Prefecture for the purpose of holding a memorial service after completing the Shikoku pilgrimage seven times. Engraved on the itabi in Otani, Susaki City is "Genna 4" (1618) and words conveying completion of the Shioku Henro, and it was built on the anniversary of Kōbō Daishi's "death" on March 21. The itabi of Fuba Hachiman-gu Shrine in Shimanto City has the same year as the itabi in Susaki City. In the center is a carving of Kōbō Daishi, and it was constructed for the purpose of performing a memorial service after completing the Shikoku pilgrimage nine times. The itabi related to the Shikoku Henro seem to be from the end of the medieval period and were constructed on the 21st – both the special day of each month as well as the memorial day of Kōbō Daishi's passing. They were built in the central and western part of the coastal area of Tosa Bay, where they were not damaged by the Nankai Trough tsunami, and there are shrines such as Hachiman-gu Shrine nearby. At the end of the medieval period, people came from temples and shrines outside Shikoku to participate on the Shikoku pilgrimage, and it is necessary to examine the relationship with those temples and shrines in those areas.

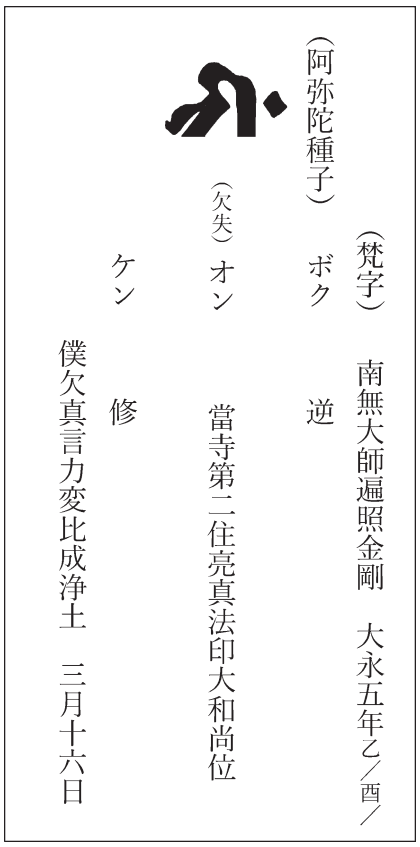
(1) kuyōto（供養塔）– a stone pagoda built for the memorial service of the deceased and ancestors.
(2) gyakushutō（逆修塔）– a stone pagoda built by oneself prior to one`s death with the hope of being reborn after death.

はじめに

板碑は、五輪塔、宝篋印塔、笠塔婆などの石造塔婆の一つで、中世に供養塔あるいは逆修塔として造立された石造塔婆で、北海道の網走から鹿児島まで全国的に分布している。関東には、典型的な板碑である武蔵型板碑が分布し、その形状は頂部を三角形に調整し、その下に二条線と呼ばれる２本の切り込みがみられる。碑面上部に主尊となる仏の種子や尊像を彫り込み、下半部には真言や偈頌、造立の主旨、建立紀年銘などを刻している。種子や銘文の一部に漆や金箔、墨書の痕跡が認められるものもある。埼玉県では約20,000基の板碑が造立されている。

四国では、特に徳島県に関東と同じ緑泥片岩を用いた阿波型板碑が多く分布している。今回取り上げる高

知県には、自然石を用いた自然石板碑が主にみられるが、九州や畿内の影響をうけたものもある。最古の板碑は室戸市元の四国霊場第26番札所龍頭山光明院金剛頂寺の嘉元３年（1305）の金剛界五仏種子板碑で、下限の板碑は今回紹介する四国遍路の板碑の一つである。ここでは、土佐湾沿岸部に分布する四国遍路成就に関係する板碑と弘法大師像を刻した板碑について述べることとする。



東久留米市多聞寺板碑銘文

土佐の四国遍路板碑

関東には武蔵型板碑が多く分布するが、その中で「南無大師遍照金剛」と刻す板碑は東京都東久留米市の多聞寺にある多聞寺三代住職逆修供養板碑の一つ、大永５年（1525）の「第二住亮真」銘の阿弥陀種子の逆修板碑が現在知られている。板碑は、上部３分の１のところで一部欠失し、阿弥陀種子が半分失われ、蓮座等もほぼ欠失し、倒壊したことを物語っている。法量は、高さが112.5㎝、幅26.7㎝、厚さ2.6㎝である。碑面上部に二条線を刻し、その下に蓮座の上に阿弥陀種子を大きく刻し、その下に真言の三帰依真言（三帰呪）[1]の梵字「オン（中央）・ボク（右）・ケン（左）」を刻し、下に右から「逆修」と中央を空けて刻している。「オン（梵字）」下に「當寺第二住亮真法印大和尚位」とやや大きな文字で刻し、右端に「南無大師遍照金剛大永五年乙／酉／」、左端に「僕欠真言力変比成浄土　三月十六日」[2]と刻している。下部端は荒い整形でこの部分が土中に差し込まれた部分である。関東では「南無大師遍照金剛」刻する板碑は報告例が少なく、現在のところ16世紀の前半にみられるようで、この多聞寺板碑はあまり類例をみない板碑である。

土佐の中世末における弘法大師信仰の一側面を知ることのできる史料として、『長宗我部地検帳』がある。高知県の東部には、東寺、西寺と呼称される室戸山明星院最御崎寺（第24番札所）と龍頭山光明院金剛頂寺（第26番札所）がある。この地域の地検帳には『土佐國安芸郡東寺地検帳』と『土佐國安芸郡西寺地検帳』がある。これらの『長宗我部地検帳』には、「七月廿一日大師コウテン」、「三月廿一日御影供テン」[3]・[4]などが多くみえており、総計七町九反七代[5]の弘法大師の祭祀に関わる田地がある。

次に弘法大師像を刻する板碑と四国遍路成就の板碑をみていきたい。

①須崎市吾井郷竹崎観音堂の弘法大師像板碑

高知県内では弘法大師像や四国遍路に関わる板碑は、現在のところ４基確認されている。この中で弘法大師像を刻している板碑は、高知県中西部の須崎市吾井郷竹崎観音堂の慶長18年（1613）の線刻弘法大師像板碑だけである。竹崎観音堂は、佐川町斗賀野の川内組から流れ須崎湾に注ぐ桜川の下流右岸の山沿いに立地している。

吾井郷を流れる桜川対岸の為貞には、『津野吾井郷地検帳』にみえる正善寺跡（現・一宇の観音堂）がある。[6] 真言宗寺院であったとされ『南路志』によると「春日山蓮華院正善寺　真言宗須崎村大善寺末　本尊千手観音不動毘沙門　弘法大師作　持仏本尊地蔵　開山弘法大師」とあり、弘法大師一夜建立の池とされるものも残っている。かつては、旧７月17日に盛大な盆踊りが行われ、桑田山、土崎、神田、須崎、多ノ郷、戸波などから多数の人が訪れた。正善寺跡には坊や大門口などの地名が残っており、大きな寺であったとされている。また、為貞には飛田の角塔婆と呼ばれていた吾桑為貞の板碑が造立されている。為貞の板碑は、四国横断自動車道工事のため名護屋坂の登り口約50m旧道左雑木林より平成８年に移動（須崎市神田飛田）されている。板碑は、正善寺跡近く位置しており、高さ148cm、幅20～30cm、厚さ20cmで、銘文は「ア（胎蔵界大日如来種子）南無阿弥陀仏／十六日／明応五天（1496）／丙／辰／五月」とある。寺は明治２年（1869）に廃寺となり、仏具、位牌、過去帳などは須崎市鍛治町の現・浄土宗発生寺に移されている。[7] 為貞にある正善寺跡（現・一宇の観音堂）は、現在の為貞集会所の付近にあったとされ、集会所には観音像と弘法大師像

図１　須崎市吾井郷観音堂弘法大師線刻板碑　（写真著者撮影、拓本は岡村庄造氏提供）

が安置され、８月の日曜日に祭礼を行っている。

吾井郷には、桑田山がありかつては桑田山村と呼ばれていた。桑田山の由来については、弘法大師が四国八十八ヶ所を開く途中に、桃の花が満開だった山を「桃の花に染んだ山」と感嘆したことから「そうだ山」と名付けたという伝承がある。

吾井郷には、『津野吾井郷地検帳』によれば「キフ子、伊勢、賀茂、妙見、糺ノ宮、天神、春日、上分賀茂、若一王子、正楽寺、聖音院、正善寺、観音、祐乗坊、良徳院、種玉庵」の神田や寺田がみえおり、正楽寺の寺名もみえている。正楽寺は江戸時代初期には退転し観音堂が残ったとされている。[8]

板碑は楕円形の平たい河原石と考えられる自然石を用いたもので、高さ69cm、幅43cm、厚さ12cmである。線刻の弘法大師は、高さ18cm、幅14cmの範囲に刻されている。牀座に趺坐する弘法大師像の右に長方形の枠が刻され、枠内碑面を平らに調整した痕跡が確認できる。弘法大師像は、やや右を向いて、椅子式の牀座に趺坐し、右手は掌を反転し五鈷杵を握り、左手は掌を上にして数珠を執る姿で刻されていると考えられる。牀座の前には斜め向く木履、牀座の傍らに注ぎ口を細かく刻したやや小さな水瓶を配置する構図（真如様）で刻されており、目鼻口は刻されていない。顔は特に線が大きく刻されている。反ったような背もたれの横木がやや線が太く、ひじ掛けが左右不均衡に刻されている。弘法大師の御影を参考に刻したものと考えられる。弘法大師の右の長方形の枠には墨書が書かれていた可能性もあり、顔も墨書で描かれたことも考えられる。碑面は、弘法大師を中心として、その下に「を」しの／長たろう／十一月廿一日／宗左衛／慶長十八年（1613）」と刻している。碑面は弘法大師像を中心に据えて、年月や建立者、年号月日を強調して刻している。この竹崎の集落を流れる桜川下流には、渡し場があり、須崎市内に向かう遍路道が通っている。なお、21日は弘法大師の入定日にあたる。この板碑は観音堂より上部の斜面に近世と思われる日月侍供養碑と地蔵菩薩供養碑、一石五輪塔、五輪塔残欠とともに置かれており、一石五輪塔には、「キャ・カ・ラ・バ・ア」の種子を刻し、その地輪に「寛永十六年（1639）」「為□□／禅門」「卯月三日」[9]と刻しており、供養塔であることがわかる。石造物が一括して置かれていることから、当初より現在地に板碑は造立されていたものではないであろう。

②中土佐町久礼の四国遍路板碑

次に高岡郡中土佐町久礼の天正期の四国遍路板碑について、みてみたい。鰹で名高い中土佐町久礼は、高知県西部の土佐湾西岸にあり、土佐湾に面した東側を除き平野部が少なく三方を山嶺に囲まれている。[10] 山嶺から流れでる３つの川は、東流し久礼の町を流れながら久礼湾に注いでいる。久礼は、江戸時代の宝永４年（1707）の宝永地震、嘉永７年（1854）の安政南海地震により甚大な被害を受けた地域である。次の南海トラフ地震による津波高は、22mと想定されている。現在、役場や高幡消防組合中土佐分署、久礼小学校、久礼中学校は、移転し高台にある。

板碑は、久礼小学校の西に位置する山腹の標高約40mの小学校の学問坂にある。板碑のある山腹の峠は、かつては長沢から久礼の町に入る近道として利用されていたと言われ、不動尊を祭っていることから、不動越えと呼ばれていた。板碑は、不動様の境内にあり、平成８年（1996）６月に設置された木造の覆屋中にあり、径約75cmの木製の台に建てられている。この板碑には、かつては病気平癒、手術などに効用があるとされ、民間信仰されていたという。

板碑は高さ90cm、幅33から34cm、厚さ17～26cmで、砂岩製である。碑面には銘が刻されている。銘文は３行にわたり刻されており、中央に「ユ（種子）南無大師遍照金尅」と大きく刻し、右に「四國中遍路□七度成就也敬白」左に「為美作國住圓心逆修也」、その下に２行にわたり「天正十九（1591）辛／卯／季／」、紀年の右に「六月廿一日」とある。「ユ（種子）」は、弥勒菩薩を表すが、弘法大師空海を意味している。この板碑は、美作国（現在の岡山県北部）の圓心という僧が、四国遍路７回成就し「天正十九年六月廿一日」の弘法大師の入定日に逆修塔として造立したものと考えられる。なお、平成15年３月28日に高知県保護有形文

図２　高岡郡中土佐町久礼の四国遍路板碑　（写真著者撮影、拓本は岡村庄造氏提供）

化財（美術工芸品ー考古資料ー ）として「久礼の四国遍路板碑」として指定された。この久礼には久礼城跡の佐竹氏の菩提寺であった禅宗の龍沢山常賢寺があり、久礼松原には久礼八幡宮が鎮座している。久礼八幡宮は、現在の須崎市安和、久礼、上ノ加江の総鎮守であるが、宝永４年（1707）の 宝永地震（南海トラフ巨大地震）により、社殿などが流出し社史などは不明であるが、天正16年（1588）の『久礼分地検帳』には、神田がみえていることから、室町時代には創建されていたとされていたと考えられている。別当寺は定光寺であったとされ、慶長期には退転し東林寺に変わったと言われている。[11] 久礼には、中世から近世の石造塔婆や石仏が多くみられる。特に高知県内最古の「暦応二年（1339）」銘の花崗岩製の五輪塔があり、他にも花崗岩製の五輪塔や宝篋印塔の相輪等の部品がみられ、港として久礼が発展していたことを物語っている。さらに、南北朝から室町時代にかけて機能していたとされる西山城跡からは、貿易陶磁器類が出土しており、青磁の奢侈品である花瓶片も出土している。[12]

久礼に弘法大師信仰の足跡を探してみると久礼大野に慶長期の弘法大師信仰をみいだすことができた。久礼大野には安楽寺跡があり、江戸時代には現須崎市大善寺末寺となっていたが、廃寺となり現在は小堂が残っている。ここに慶長15年（1610）銘の厨子が残っており、墨書で「慶長十五年かのえ／いぬのとし／南無大師遍照金尅／南無地蔵大菩薩／８月廿四日書写□遍」とあるものが確認されており、上記の板碑に次ぐ当地の弘法大師信仰を物語る史料である。[13]

③須崎市大谷の四国遍路板碑

中土佐町久礼の東に位置する須崎市大谷の海岸部にも四国遍路板碑がある。須崎市には石造塔婆がみられ、多ノ郷宮ノ下の賀茂神社には花崗岩製の鎌倉時代後期の石造層塔（十三重石塔）がある。先に紹介した

図３　須崎市大谷の四国遍路板碑　（写真著者撮影、拓本は岡村庄造氏提供）

吾桑為貞の板碑や伝・氷上志計志麻呂の天文24年（1555）銘板碑、そして野見湾に接した臨済宗江雲寺には永禄９年（1566）銘の地蔵菩薩の梵字を刻する禅宗板碑がある。

四国遍路板碑のある須崎市大谷は、高知県の中央部の土佐湾奥に位置する野見湾に接し、眼前に海がみえる。この大谷地区集落の東北に標高279.4ｍの法印山があり、南方向に延びる山地は小半島を形成している。大谷から久通に通じる坂道が法印坂と呼ばれている。この坂の中腹には「法印さん」と呼ばれる石碑がある。天文11年（1542）に現須崎市にある大善寺の住職道貞が久通から大谷に行く坂の途中で、坂の北西に位置する「ふなごおら（船小浦）」から盗賊が射た矢に当たり亡くなったという。その矢は道貞を射貫き、南の谷に落ちたので、そこを矢ヶ谷と呼ぶようになったという。道貞をその地に葬り墓標を造立し、旧の正月十五日を縁日とし供養を行った。その頃から法印坂と呼称するようになったといわれている。なお、地検帳にも道貞法印施餓鬼田がみえている。[14]・[15] この板碑は、現在大谷集落の奥の法印坂トンネルの手前より急峻な山道をしばらく登るとある。覆屋の左に南西方向に向いて板碑が造立されている。しかし、本来は現地より40m下の先の伝承地名に出てくる「矢ヶ谷口ミコガウチ」に造立されたもので、土地改良に伴い移設されたものとされている。

大谷の板碑は、高さ87cm、幅33cm、厚さ29cmで、下部幅39cm、上部幅は12cmと狭く、三角形状をしている。下部は、正面左が欠損しその上で折損しているが修復されている。銘文は碑面中央にやや大きく「ユ（円相に種子）奉供養遍路成就」と刻し、右に「元和〆年　施」、中央左に「三月廿一日　主」と刻している。「元和四年」の「四」は異体字を使用している。「三月廿一日」は、弘法大師の入定月日にあたることから、遍路成就と弘法大師供養のために板碑を造立したものと考えられる。

この板碑のある大谷には地検帳によれば地福寺という寺があったが、江戸時代に廃寺となっている。西の大谷集落には須賀神社が鎮座し、天正期には天王宮と呼ばれていた。[16] 現在の須崎市西古市には、須崎八幡宮が鎮座している。

④四万十市不破八幡宮の四国遍路板碑

高知県の西南部の四万十市（旧中村市）でも四国遍路板碑が１基確認されている。四万十市は、四万十川下流域にある市で、不波八幡宮は四万十川と渡川の合流地点よりやや上流の四万十川左岸に位置し、小高い

図４　四万十市不破八幡宮の四国遍路板碑　（写真著者撮影、拓本は山本弘光氏提供）

で丘陵の約標高14mに社殿がある。板碑は、四万十川に向く参道の左にある。高知県道山路中村線342号線の拡幅により神社側に移動されたとされたという。

この板碑は、自然石板碑で高さ113cm、幅60cm、厚さ16.7cmで、下部の蓮華文以下は埋没している。銘文は、中央にやや大きく「ユ（種子）奉納四國中遍路第九度成就□」と刻し、右に上下２行に「于時元和四年（1618）／戊／午」、「為逆修供養」と刻している。左には上下２行に「施主道圓敬白」、「十一月廿一日」[17]と弘法大師の入定の日を刻している。銘文により遍路を九度成就したことと逆修供養のため造立したことがわかる。

不破八幡宮は、社伝によると応仁２年（1468）に下向した一条教房が石清水八幡宮を勧請したと伝えられ幡多の総鎮守としたとされている。現在の社殿は近年も修理されているが、かつての修理時に向拝の西虹梁上の墨書銘に「永禄二年」、身舎西南隅梁につく斗の下部に「岡野兵衛尉永禄元年」銘などがあり、再建がされたものと裏付けられた。年代は、永禄元年（1558）から永禄２年（1559）にかけて再建されたとされている。さらに、解体修理中に本殿下から48個の礫石経が出土したとされ、再建に関わる祭祀に用いられ、埋納されたものと考えられる。[18] なお、地検帳によると神宮寺が所在していた事が知られている。[19] 不破八幡宮の板碑は、須崎市大谷の四国遍路板碑と同年代の板碑で８ヵ月後に造立されたものである。

まとめ

現在まで高知県内で確認されている四国遍路の板碑は、天正19年（1591）１基と元和４年（1618）の２基になる。これに慶長18年（1613）の弘法大師像を刻した板碑１基がある。つまり、四国遍路の板碑の造立は1591年から1618年の間に造立されていることになり、16世紀末～17世紀初頭にみられることになる。

造立日をみてみると弘法大師像板碑が11月21日、久礼の四国遍路の板碑が６月21日、大谷の四国遍路板碑が３月21日、四万十市不破の四国遍路板碑が11月21日となっており、弘法大師の入定日に造立されている。四国遍路の成就を記念し、さらに逆修、供養として造立している。そこには、板碑の銘の中心となる「ユ」の種子や「南無大師遍照金剛」があり、大師信仰に基づいていることが知られる。四国遍路に関わる板碑が、高知県以外でも確認されれば、この時期の四国遍路と石造塔婆の関係が見えてくるものと思われる。

この板碑の所在する高岡郡中土佐町や須崎市大谷、四万十市不破には四国霊場八十八ヶ所寺院が存在していない。板碑は高知県中西部から西部に現在分布し、造立地をみてみると南海トラフの津波の影響を受けない沿岸部の港近く位置しており、当時の遍路道沿いであった可能性も考えられる。また、造立地には天王宮や八幡宮があり何らかの関係も考えられる。

四国遍路の成就回数は７回と９回とが確認できる。不波八幡宮の四国遍路板碑では、成就回数を「第九度成就」としている。久礼の四国遍路板碑は、「□七度成就」としている。□はかつて苑と判読されていたが、不破八幡宮の板碑から考えると「第」と判読できるのではないかと思われる。これら板碑から遍路の回数を示す用語として「第」や「度」が使用されていたことが理解される。「遍路修行」という落書から中世末から四国遍路を何度も廻ることが、１つの修行の形態とされていたと考えられる。大谷の四国遍路板碑は「遍路成就」のみであるので、１回のみであろうか。つまり、板碑造立年以前から遍路を重ねていたことになる。成就者名をみると、四国遍路を廻る修行者と考えられ、修行者を支える信仰集団の存在も想定される。板碑造立にも、石材の選定、切り出し、加工、刻銘、運搬、造立に関わる石工とその費用など多くの人々の協力が必要であったことは容易に想定できる。

さて、中土佐町久礼の四国遍路板碑には、「美作國住圓心」とあり、美作国は現在の岡山県北部あたりになる。この時期に他国から四国遍路に来た人々の落書について、一つ紹介しておきたい。土佐神社の本殿の落書は、墨書年号の永禄十三年（元亀元年・1570）と元亀二年（1571）の頃のものと考えられている。その中に年号はないが、「備中之国日差寺玉蔵寺／松本坊同行七人」と読めるものがある。この日差寺については、すでに『岡山県の地名』に述べられおり、寺名も知られている。備中国（岡山県西部）の日差寺、玉蔵寺、そして松本坊の７人が遍路に来ていたことを物語っている。日差寺は、岡山県倉敷市の日差山にある寺で、中世に天台宗の拠点としてはかなりの勢力があったとされる山寺である。近世初頭に藩主により日蓮宗に改宗を命ぜられ、反抗し寺院を分散させたとされる。現在は、日蓮宗系単立寺院となっている。倉敷市受法寺蔵となっている室町時代の「絹本著色仏涅槃図」に「玉蔵寺」の寺名がみえる。

近世のいわゆる遍路墓でも四国内を除くと「備前・備中、美作」の出身とされる遍路墓が多い。なお、土佐神社の幣殿に「与州等妙寺」（北宇和郡鬼北町）、「遍路修行／ ・・・・・・・・ ／南無大師遍照金剛」と墨書があり、遍路修行[20] とみえている。中世末には四国以外の寺社等からの四国遍路に来ており、その地域の寺社等との関わりについても検討をする事が必要である。中世の四国遍路を知るには、四国だけではなく、山陽道などの各地域での四国遍路に関係する史料調査が重要と思われ、それらを期待したい。

最後に、土佐の近世の遍路成就碑について触れておきたい。

土佐の近世の四国遍路成就碑の造立年代は、明暦２年（1656）から天保６年（1835）まで確認されている。造立地は、近世の遍路道沿いと札所寺院境内で、今回述べた四国遍路板碑と異なった傾向をみせている。このことについては、別稿で述べることとする。

なお、拓本の画像については岡村庄造氏、山本弘光氏から提供を受けた記して謝意を申しあげたい。

【註】

⑴　川勝政太郎「付載　種子・真言一覧　昭和十八年十月作成」『梵字講話』 1980　河原書店
⑵　岡田芳朗「多聞寺の板碑」「東久留米市板碑図録」『東久留米市文化財資料集ー板碑編ー』東久留米市文化財資料集３　1975　東久留米市教育委員会
⑶　廣江　清「仏教の諸相ー寺院の行事ー」『中世末土佐の宗教　史談選書(8)』1982年　土佐史談会
⑷　小松勝記「長宗我部地検帳からみる弘法大師信仰」『善通寺教学振興会紀要』第19号　2014年　善通寺
⑸　註⑷に同じ
⑹　日本歴史地名大系40　『高知県の地名』1983　平凡社
⑺　吾桑の歴史を探ねん会『ふるさと～吾桑の今昔～』2019　吾桑地区住民会議
⑻　角川地名大事典39　『高知県』1986　角川書店
⑼　香崎和平「須崎市の石造物について」『土佐史談』188　1992　土佐史談会
⑽・⑾　註⑹に同じ
⑿　吉成承三編著『西山城跡ー四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ー』㈶高知県文化財団埋蔵文化財センター調査報告書第106集 2008　高知県教育委員会　㈶高知県文化財団埋蔵文化財センター
⒀　林　勇作編著『中土佐町の社寺(1) ー中土佐町史料ー』2011　中土佐町教育委員会
⒁　註⑹に同じ
⒂　須崎市史編纂委員会「民俗と伝承　伝説と民話」『須崎市史』1974　須崎市
⒃　註⑹に同じ
⒄　山本弘光「高知県西南部のへんろ・廻国・大師信仰関連石造物補遺」『西南四国歴史文化論叢　よど』第22号　2021　予土歴史文化研究会
⒅　岡本健児「不破八幡宮と田野々、熊野神社の礫石経」『土佐神道考古学』1987　高知県神社庁
⒆　註⒄に同じ
⒇　なお、『長宗我部地検帳』には、遍路給地が現在の高知県中西部の仁淀川沿いの高岡郡佐川町、越知町に中心にみられるが、この地域には越知町横倉山などの修験道関連の霊山があり、中世末の聖との関係も今後検討する必要があろう。

【参考文献】

都窪郡教育會『都窪郡誌』1923　都窪郡教育會
廣江　清『長宗我部地検帳の神々』1972　土佐民俗学会
廣江　清『中世末土佐の宗教　史談選書(8)』1982　土佐史談会
文化財建造物保存技術協会『重要文化財土佐神社本殿幣殿及び拝殿鼓楼保存修理工事報告書』1987　土佐神社
日本歴史地名大系34『岡山県の地名』1988　平凡社
高知県立図書館『南路志』第３巻 1991　高知県立図書館
岡村庄造「遍路石に見える四国巡礼の諸相」『日本の石仏』88　1998　日本石仏協会
坂詰秀一編『仏教考古学事典』2003　雄山閣
岡本桂典『石の仏ー土佐の石造美術Ｉー土佐国石塔・石仏巡礼Ｉ』2004　高知県立歴史民俗資料館